

子どもたち一人一人のよさを引き出す豊かな環境と造形表現

東良 雅人 京都市総合教育センター指導室長

絵は、「見るもの」だけと思いがちだが、「聴く」ことも大事だ。作品を前に「うまく描けたね」というのは、活動の「過程」を知らなくても言える。絵に込められた願いや思い、活動の「過程」を「聴く」のだ。絵を介してコミュニケーションも生まれ、人とつながり、表現する意味にも気付いて行くだらう。表現は大人の思う見栄えが重要なのではない。描くことは目的でなく学びの手段であり、「過程」に「共感」する事が重要だ。時には、友達同士、保護者、地域の応援団等、様々な人たちと「共感」する場を作るのだ。実際、近年は、子どもの学びの「過程」も伝える「授業展」のような試みが園や学校でも見られるようになってきている。

(ある一人の子どもの幼児期から大学生までの117点の作品のスライドを映しながら) 子どもは、単に目の前にあるものを描くだけではなく、その時期その時期に家庭、園、学校、地域社会、自然環境、京都の文化等と関わり、考え、感じ、学んだことを表現する。その子の「今」だからこそ描きたいものを描いている。年齢を超えた描き方を大人の都合だけで教えてしまうと、本来は自ら出会い、気付き、試そうとする機会を奪う。先生はできる限りその姿に寄り添い、「見逃すまい」と「過程」に目を向け、「共感」することが重要だ。

各園では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有や、「架け橋プログラム」等の取組も進んでいるが、「表現」の活動もより広い枠の中でも考えることが大事だ。「5領域」を森、「各領域」を木に例えると、「大きな森」と「木」、「表現」の「木」と他の4本の「木」の関連性を俯瞰的に見る視点が重要で、特に「表現」は、子どもたちの「環境」との関わりが重要だ。子どもは、環境に関わり、人を含めた周りの環境から刺激を受け、いろいろな気付きを得る。そして、自分で表したいことを表現する過程で充実感や満足感を味わい、それが次への好奇心や主体的にもっとやってみようという気持ちに繋がっていくのだ。子どもの主体的な活動を生み出すためには、その活動を何のためにするのか、どんな学びがあるかという(やるべきこと)の見通しを先生が持ち、子どもの必然性を大切に一人一人が自分事となる活動を考える。そして、子どもが(やりたいこと)を見つけ、自分なりの意味や価値をつくりだし、それを(やる)ように準備する。そのために環境の設定も、活動のめあてを大事にし、先生が子どもの活動のイメージを持つことが大事であり、材料・用具なら、出すタイミング、順序、量、出す場所等を考えること、描く場、材料・用具の配置等の設定なら、動線も意識すること、表現の素材の考え方、つくったものを飾る活動等、留意点は多岐に渡る。

幼保小の発達や学びの連続性は造形表現の切り口からも考えたい。造形表現は、全ての子どもが豊かな存在であることを前提とし、空っぽの缶の中に何かを詰めるという発想ではなく、元々子どものもつ豊かさを造形表現によって引き出すことと捉える。そのためにはどんな環境や活動にするのかを考えることが大事である。造形表現は特に、自分のことや、世界を創造できる面白さや楽しさを実感しやすい。しかし、大人の必然性が強くなれば、この面白さや楽しさが薄れていく。子どもは、学びたくて仕方がない存在でもある。そういう子どもの造形表現や環境はどうあるべきか、今日の話をもとにこれまでの活動を振り返り、今後のよりよい実践を期待したい